

複合名詞句における統語的派生について

真保 栄, 俊
九州大学人文科学府

<https://doi.org/10.15017/24562>

出版情報 : 九大英文学. 53, pp.139-158, 2011-03-31. 九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン :
権利関係 :

複合名詞句における統語的派生について*

真保 栄 俊

1 . はじめに

(1)に示すように、関係節は同格節とは異なる特性を持っている。(1a)の同格節は元位置のコピーが読まれ Condition C 違反を生じるため非文法的となる一方、¹ (1b)の関係節は元位置のコピーは読まれずその結果文法的となっている。²

(1) a. ??/*Which argument [that John_i is a genius] did he_i believe?

b. Which argument [that John_i made] did he_i believe? (Fox 1999: 164)

この同格節と関係節の特性の差異を明らかにするために、本論文では先行研究をもとにそれらを含む文がどのような統語的派生をたどるのかを考察していく。そして先行研究の問題点を指摘し、新たな分析を提案する。

2 . Late Merger 分析

本節では、Lebeaux (1988)の late merger 分析をみていく。この分析において重要な概念が Chomsky (1981)で提案された投射原理である。

(2) 投射原理 (Chomsky 1981)

語彙項目の選択特性は全ての統語レベルで満足されなければならない。

この原理から Lebeaux (1988)では、項は基底構造で併合されなければならない、付加詞はその必要がないと主張している。(3)において、同格節は項なので基底構造で併合され、結果として Condition C を違反してしまう。

- (3) DS: *He_i denied whose claim that John_i liked Mary. Move- α \longrightarrow
 SS: *Whose claim that John_i liked Mary did he_i deny t ?

一方、関係節は付加詞と考えられているので基底構造では併合されず、(4a)で示したように別の構造で作られる。S₁で Move- α により A'移動が行われた後、(4b)で関係節 S²が Adjoin- α により付加され、(4c)の構造ができる。この場合、which claim の元位置では関係節 that John_i made が併合されていないので、その copy が存在せず Condition C の違反は生じない。よって、この文は文法的となる。

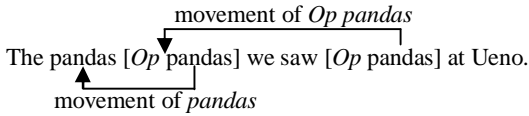
- (4) a. DS: S₁: He_i later denied which claim Move- α \longrightarrow
 S₂: that John_i made
 b. S₁: Which claim did he_i deny t \longrightarrow Adjoin- α \longrightarrow
 S₂: that John_i made
 c. SS: Which claim that John_i made did he_i later deny t ?

このように、Lebeaux (1988)の late merger 分析は項と付加詞という違いから(1)の容認性の差異を説明している。しかしながら、最近の関係節における分析では全ての関係節が付加詞となるわけではないことが言われている。次節で関係節に関する先行研究を議論していく。

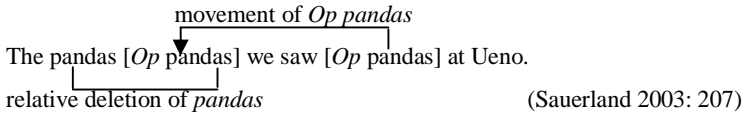
3 . 関係節の先行研究

Sauerland (2003)では関係節は2つの方法で派生すると主張している。一つは(5a)の raising 分析で、もう一つは(5b)の matching 分析である。これらをそれぞれ raising 派生、matching 派生と呼ぶことにする。

(5) a. raising 派生

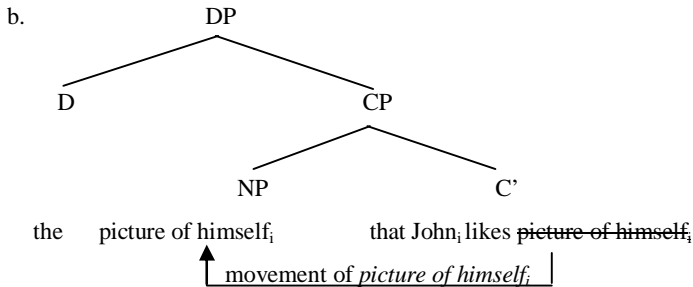


b. matching 派生



raising 派生とは関係節内で基底生成した先行詞要素が表層位置の CP 指定部に移動する派生である。(6)では先行詞要素 *picture of himself_i* は関係節内で基底生成し、*John_i* によって照応形 *himself_i* が認可される。その後 *picture of himself_i* は CP 指定部まで移動する。

(6) a. the picture of himself_i that John_i likes



matching 派生も raising 派生と同じような派生をたどるが、同じ先行詞が 2 つ存在するという点で異なる。表層位置にある NP を external head、関係節内で基底生成し、CP 指定部へ移動する NP を internal head と呼ぶ。

(7) The pandas [Op pandas] we saw [Op pandas] at Ueno

external head

internal head

matching 派生の具体例に入る前に、Fiengo and May (1994)で提案されている vehicle change を説明する。vehicle change とは省略の際に LF で省略要素内の R-expression を代名詞に変える操作である。vehicle change を想定することで、(8a,b)の容認性の差異を説明することができる。(8a)において like Mary_i が省略されるが、LF では vehicle change により省略要素に含まれる Mary_i は代名詞 her_i に変えられる。その結果、Condition B に違反してしまうので、(8a)は容認不可能となる。しかし、(8b)は同じように削除要素内の Mary_i が her_i に変えられても、代名詞 her_i は局所的には C 統御されないので容認可能となる。

(8) a. *John likes Mary_i and she_i does <like her_i>, too.

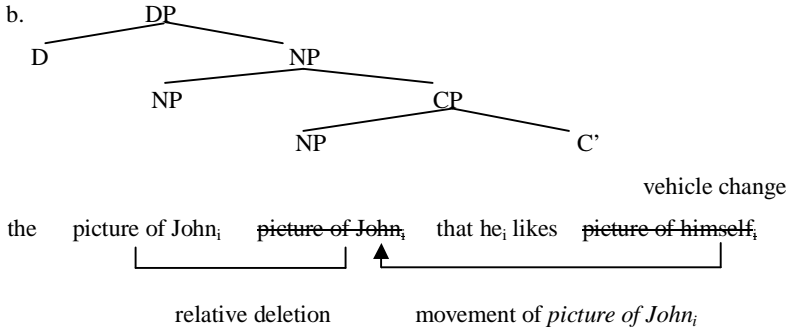
local c-command = Condition B vehicle change

b. John likes the story about Mary_i and she_i knows he does <like the story about

no local c-command = no Condition B her_i>
vehicle change

Sauerland は vehicle change が matching 派生でも起こり、その場合代名詞ではなく照応形に変えることができると主張している。matching 派生をとる(9a)の関係節は次のような派生を行う。まず、internal head の the picture of John が CP 指定部に移動し、同じ要素である external head との relative deletion によりその internal head は消される。そして束縛条件が適用される前に vehicle change が起こり、internal head の picture of John_i は picture of himself_i に変えられる。³ これにより、Condition C を引き起こすことなく(9a)の関係節を派生させることができる。

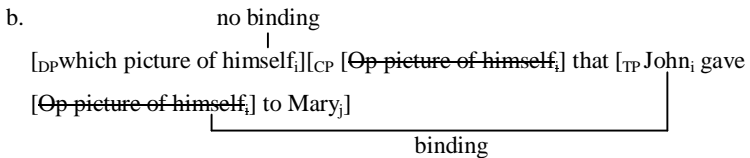
(9) a. the picture of John_i that he_i likes



しかし、この Sauerland (2003)の分析では(10a)の例が問題となる。(10a)の関係節について、もしこれが matching 派生をとるならば external head と internal head、2つの先行詞が存在する。internal head の照応形は関係節内の John_i によって束縛されるが、表層位置に基底生成する external head の照応形は束縛されず解釈不可能な要素になってしまう。したがって、この(10a)の関係節は raising 派生をとる必要がある。

(10) a. [Which picture of himself_i that John_i gave to Mary_j] did she_j take home?

(Takahashi and Hulsey 2009: 410)



ここで(6)で示した通り、raising 派生をとる関係節はその先行詞が項となるので、Lebeaux (1988)の late merger 分析のもとではこの関係節は基底構造で併合しないとはいけない。(11a)のように関係節が基底構造で併合された場合、Mary_j が she_j に束縛される位置にコピーを残すことになるので Condition C 違反で非文法的と予測してしまう。しかしながら、(10a)の文は容認可能な文である。

- (11) a. she_j take home [which picture of himself_i that John_i gave to Mary_j]
 b. [Which picture of himself_i that John_i gave to Mary_j] did she_j take home
 [which picture of himself_i that John_i gave to Mary_j]
 Condition C violation

Sauerland (2003)に対し、Henderson (2007)は sideward movement を用いた新しい派生を提案し、全ての関係節はその派生をとると主張した。この派生を promotion 派生と呼ぶ。(12a)の派生について、(12b)で照応形 himself は John によって認可され、その後循環的に派生が進み(12c)で picture of himself が CP 指定部に移動する。(12d)で決定詞 the と併合するために picture of himself のコピーを作り、the と併合する。この操作が sideward movement である。この時(12e)のように 2 つの統語要素 L,M がつくりだされることになる。最後に(12f)で統語要素 L が M (= the picture of himself)に付加し、(12a)が形成される。

- (12) a. the picture of himself_i that John_i likes
 b. [_{TP} John_i [_{VP} likes [_{NP} picture of himself_i]]]
 licensing of the anaphor, *himself*
 c. [_{CP} [_{NP} picture of himself_i] that [_{TP} John_i [_{VP} likes [_{NP} picture of himself_i]]]]
 movement of *picture of himself*
 d. [_{CP} [_{NP} picture of himself_i] that [_{TP} John_i [_{VP} likes [_{NP} picture of himself_i]]]]
 [_{NP} picture of himself_i] [_{DP} the...]
 The NP, *picture of himself*, is copied and merge with *the*
 (sideward movement)
 e. L = [_{CP} [_{NP} picture of himself_i] that [_{TP} John_i [_{VP} likes [_{NP} picture of himself_i]]]]
 M = [_{DP} the [_{NP} picture of himself_i]] L is adjoined to *the NP* in M

- f. [DP the [NP picture of himself_i] [CP [NP picture of himself_i] that [TP John
[VP likes [NP picture of himself_i]]]]] relative clause chain

Henderson (2007)の想定する promotion 派生はどの関係節も必ず付加詞となり late merger できるという点で、Lebeaux (1988)の late merger 分析と合うよう思われる。関係節を全て promotion 派生で扱うために、Henderson (2007)はどの A'移動でも vehicle change が起きると仮定している。それに従うと、matching 派生で扱われる(13a)の関係節の派生は以下のようになる。(13b)で示された通り、先行要素 the picture of John_i が関係節内に基底生成し、その後 CP 指定部へ移動する。その際 LF では元位置にあるコピーの John_i が vehicle change により himself_i に変えられる。これは Condition C 効果を引き起こさずに、promotion 派生で(13a)を生成できることを示す。

- (13) a. that he_i likes the picture of John_i

A'-movement of *the picture of John_i* to the Spec of CP

- b. the picture of John_i that he_i likes <the picture of himself_i>

vehicle change.

しかし全ての A'移動で vehicle change が可能であるという仮定は(14)のような例を誤って文法的と予測してしまう。

- (14) a. *Which picture of John_i does he_i like?

- b. he_i like [which picture of John_i]

A'-movement of *which picture of John_i*

- c. [which picture of John_i] does he_i like <[which picture of himself_i]>

vehicle change

元位置にある which picture of John_iのコピーは vehicle change により John_i が himself_i に変えられる。それにより、Condition C が回避されることになり、結果的に誤った予測が出てきてしまう。よって、関係節を promotion 派生だけ

で捉えるために、このような仮定を立てるというのは妥当ではない。ここで本論文の一つ目の提案として次のことを仮定する。

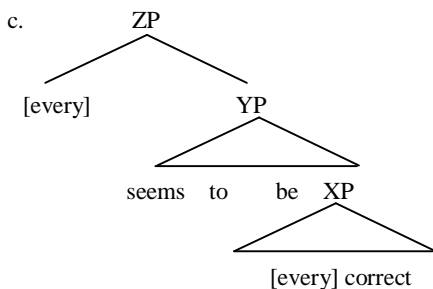
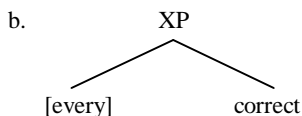
- (15) 関係節は 2 つの派生方法があり、どちらか派生できる方で派生する。
 一つは Sauerland (2003)で提案されている vehicle change を含む matching 派生、もう一つは Henderson (2007)が提案した sideward movement を含む promotion 派生である。

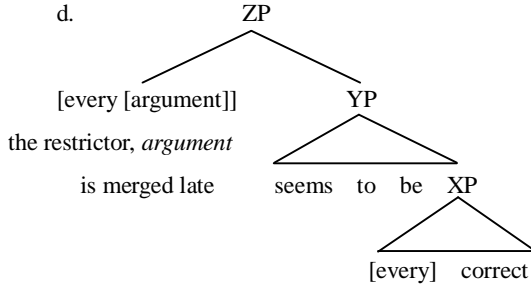
これは関係節が必ず付加詞であることを意味し、本論文の代案において重要な役割を果たす。

4 . Wholesale Late Merger 分析

この節では Takahashi and Hulsey (2009)の wholesale late merger 分析を考察していく。Takahashi and Hulsey (2009)は付加詞に加え、決定詞や演算子の制限詞も late merger 操作を受けることができるという wholesale late merger の考えを採用し、格の必要性から併合される領域を定義している。wholesale late merger は次のように行われる。

- (16) a. Every argument seems to be correct.





(16b)の基底構造で決定詞 *every* が *correct* と併合される。(16c)でそのまま派生が進み、(16d)で *every* が ZP へ移動した時に、非循環的に制限詞 *argument* が併合される。Takahashi and Hulsey (2009)は格を受ける必要のない決定詞や演算子の制限詞はどの段階でも併合することができ、格の必要な制限詞はその Case assigner が格を与えることのできる位置、つまり Case assigner の C 統御内で併合されなければいけないと提案している。この場合 NP は格を必要とし、CP は格を必要としない。重要なことは Takahashi and Hulsey (2009)が Sauerland によって提案された raising 派生と matching 派生を想定していることである。関係節が matching 派生だと制限詞は NP になり、raising 派生だと制限詞は CP になる。ここで Lebeaux の late merger 分析における問題点を指摘するとともに、Takahashi and Hulsey の wholesale late merger 分析がその問題を解決できることを示していく。

1 つ目の問題点は同格節の A 移動が Condition C を回避するという事実を説明できないことである。Lebeaux (1988)の枠組みだと(17a)の同格節 *that John_i was asleep* は名詞 *claim* の項なので、(2)の投射原理により基底位置から組み込まれなければならない。これは(17b)で示したとおり *John_i* が *him_i* よりも低い位置に現れるので Condition C に違反し非文法的と予測される。しかしながら、この文は容認可能であり事実と異なる。

(17) a. The claim that John_i was asleep seems to him_i to be correct.

(Chomsky 1993: 37)

b. [[The claim that John_i was asleep] seems to him_i to be ~~[the claim that John_i was asleep]~~ correct]

Takahashi and Hulsey (2009)の分析はこれを正しく予測できる。(18a)のように決定詞 the は循環的に併合され、(18b)で VP の付加位置へ移動する。⁴そこは Case assigner である主要部 T の C 統御領域、つまり格をうける位置なので、ここで制限詞 claim that John was asleep が wholesale late merger される。そして制限詞を伴った決定詞はそのまま TP 指定部へと移動していく。John_i は him_i よりも高い位置で併合されるので、この文は文法的と正しく予測される。

(18) a. [_{VP}[the] [_{VP} seems to him_i [_{TP}[the] to be [[the] correct]]]]

b. [_{VP}[the [claim that John_i was asleep]] [_{VP} seems to him_i [_{TP}[the] to be [[the] correct]]]]

Merger of NP

c. [_{TP}[the [claim that John_i was asleep]] T [_{VP}[the [claim that John_i was asleep]] [_{VP} seems to him_i [_{TP}[the] to be [[the] correct]]]]

次に Lebeaux の late merger 分析で問題となるのは raising 派生をとる関係節が late merger できないことである。(10a)の問題点をもう一度(19)に示す。matching 派生だと external head の照応形 himself_i が認可されないため、この関係節は raising 派生をとる。しかし raising 派生をとる関係節は項となるので、Lebeaux の late merger 分析ではこの関係節を基底構造で併合してしまう。関係節内の Mary_i が she_i に束縛されるので Condition C に違反し、(19)を非文法的と誤って予測してしまう。

(19) [Which picture of himself_i that John_i gave to Mary_j] did she_j take home?

(Takahashi and Hulsey 2009: 410)

Takahashi and Hulsey の分析に従うと、raising 派生をとる(20a)の関係節において、wh 決定詞の制限詞は格を必要としない CP なので自由に併合されることができる。よって制限詞 *picture of himself that John gave to Mary* は wh 決定詞が CP 指定部へ移動した後併合される。これは *himself* が John に認可されていて、かつ Mary は Condition C に違反しない。したがって、文法的という正しい予測がなされる。

- (20) a. [_{CP} [_{CP} [_{CP} *picture of himself_i that John_i gave to Mary_j]]] did she_j take home]?*
- b. [_{CP} [which] did [_{TP} she_j take [which] home]]
- c. [_{CP} [which] [_{CP} *picture of himself_i that John_i gave to Mary_j]]] did [_{TP} she_j take [which] home]]] merger of CP*

このことから、Takahashi and Hulsey の wholesale late merger 分析は Lebeaux の late merger 分析より適切に同格節と関係節における現象を捉えることができると言える。しかしながら、Takahashi and Hulsey の分析には反例が存在する。

- (21) a. Which picture of John_i that he_i gave to Mary_k did she_k cherish?
- (Henderson 2007: 23)
- b. [she_k [_{vP} cherish [which picture of John_i that he_i gave to Mary_k]]]
- c. [which picture of John_i that he_i gave to Mary_k] did she_k [_{vP} cherish [which picture of John_i that he_i gave to Mary_k]]]
- Condition C violation

この(21a)の関係節は John_i が関係節内で he_i に束縛されてはいけなないので、vehicle change の操作を必要とする matching 派生をとる。matching 派生の制限詞は NP なので、Case assigner *cherish* の C 統御領域、つまり(21b)のように vP 内で併合される。その場合 Mary_k が she_k に束縛されるので Condition C に違反し非文法的という誤った予測をたててしまう。⁵

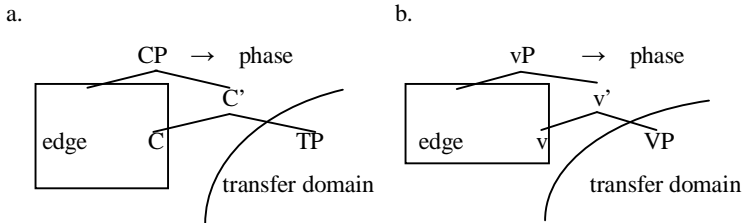
次節では、late merger 分析における代案を提示し、これまで見てきた

Lebeaux (1988)や Takahashi and Hulsey (2009)の分析で問題となる例が説明できることを示していく。

5 . 代案

本論文は Chomsky (2000, 2001)で提唱された phase 理論をもとに late merger の適用条件を定義する。一般的に phase は vP と CP と考えられていて、いったん phase まで派生が進むと edge だけを残し、その補部は音韻部門、意味部門へと送られる。CP、vP の transfer domain はそれぞれ TP、VP となる。ただし、CP を伴わない TP や外項のない VP、つまり受身の動詞や非対格動詞などは transfer domain にならず、それらは次の transfer domain で送られる。

(22) Phase (Chomsky 2000, 2001)



この phase 理論に基づき、本論文では項は transfer domain 内で併合されなければならないが、付加詞は transfer domain の外で併合できると提案する。この提案は Chomsky (1981)の θ 基準によって導かれる。

(23) θ 基準 (Chomsky 1981)

各項は一つの θ 役割を持ち、各 θ 役割は一つの項にのみ付与される。

項は θ 役割が必要なので transfer domain 内で併合されなければならないが、付加詞は θ 役割を必要としないので transfer domain 内で併合される必要はない。この仮定に従うと、同格節は項なので θ 役割が必要ということになる。その場合、V から NP に付与された θ 役割を継承することで、同格節 CP は θ

役割をもつことができる。したがって、同格節は θ 役割の継承のために主要部 NP と同じ transfer domain 内で併合されなければならない。一方、(15)で提案したように、関係節が matching 派生か promotion 派生をもつと想定すると、どちらの派生をとっても関係節は付加詞となる。したがって、関係節は θ 役割を必要としないので、transfer domain の外で併合することができる。

- (24) a. 項は θ 役割をもらうため θ assigner と同じ transfer domain 内で併合されなければならない。もし項が同格節を含む場合、その同格節は θ 役割を継承するために項と同じ transfer domain で併合されなければならない。
- b. 付加詞は θ 役割を必要としないため自由に併合できる。

この代案を用いることで、Lebeaux (1988) や Takahashi and Hulsey (2009)で問題となる例が適切に捉えられることをみていく。まず Lebeaux (1988)の分析で問題となった例を検証する。(25a) (= (17a))において、代案(24)に従うなら同格節 that John_i was asleep は θ 役割を継承するために、項 the claim と同じ transfer domain 内で併合されなければならない。その項は θ 役割をもらうため θ assigner の T と同じ transfer domain 内、つまり TP 内で併合される。したがってこの同格節は項と同じ transfer domain の TP 内で、かつ Condition C を違反しないように him より高い位置で併合される必要がある。結果として同格節 that John_i was asleep は TP 指定部で併合される。その結果できた(25b)は John_i が Condition C に違反せず、容認可能な文となる。

- (25) a. [The claim that John_i was asleep] seems to him_i to be correct.
- b. [_{TP}[the claim [that John_i was asleep]] T [_{VP}[the claim] [_{VP} seems to him_i [_{TP}[the claim] to be [[the claim] correct]]]]]

次に raising 派生では関係節を非循環的に併合できないので Lebeaux (1988)の分析だと(26) (= (19))のような文を非文法的と予測してしまう。しかしながら、本論文の提案のもとでは関係節は全て付加詞なので transfer domain の外で自

由に併合できる。したがって関係節の先行詞 *which picture of himself_i* が CP 指定部へ移動した後、関係節が併合され(26)の文は文法的となる。これも本論文の提案で適切に説明できる。

(26) [Which picture of himself_i that John_i gave to Mary_j] did she_j take home?

また Takahashi and Hulsey (2009)で問題となった(27) (=21a))の例文も同様に考えることができる。関係節は付加詞なので自由に併合することができる。項の *which picture of John_i* が CP 指定部に移動した後、関係節が併合される。よって Condition C を引き起こさず文法的という予測がでてくる。

(27) Which picture of John_i that he_i gave to Mary_k did she_k cherish?

このように本論文での提案は Lebeaux (1988)や Takahashi and Hulsey (2009)の反例を適切に捉えることができる。⁶ さらにこの提案は DP にも適用される。DP については Lebeaux (2009)の *overlay* 分析でも説明されているが、本論文での提案の方がよりミニマリスト・プログラムに沿った分析であることを示す。Lebeaux (2009)では全ての DP は語彙要素を持たない *little pro* として併合され、派生の途中で語彙要素が挿入される、*overlay* の操作がなされると主張している。例えば、(28a)の派生はまず *pro* で基底生成して、その *pro* の A 移動が起きた後 *overlay* が行われ、Condition C を回避することができる。

(28) a. The pictures of John_i seem to him_i to be quite wonderful.

(Lebeaux 2009: 36)

- b. seems to him_i *pro* to be quite wonderful \longrightarrow movement
c. *pro* seems to him_i *t* to be quite wonderful \longrightarrow *overlay*
d. The pictures of John_i seem to him_i to be quite wonderful \longrightarrow binding

一方、(29a)は *pro* で基底生成するまでは(28b)と同じだが、(28b)と違うのは A' 移動を行う前に *overlay* が行われることである。そのため(29c)で Condition C

を引き起こしてしまい、この文は非文法的となる。

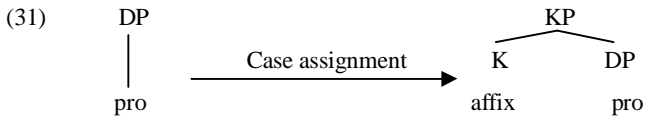
- (29) a. * Which pictures of John_i does he_i like? (Lebeaux 2009: 37)
- b. he_i likes pro_i overlay →
- c. he_i likes which picture of John_i Condition C →
- d. *he_i likes which picture of John_i movement →
- e. * Which pictures of John_i does he_i like *t*?

A 移動と A' 移動では overlay の行われるタイミングが異なっている。この説明として、Lebeaux (2009)では 2 つの案を出している。

一つは接辞の制約で overlay のタイミングの違いを説明することである。Lebeaux (2009)は格が接辞であるという考えのもと(30)に示された接辞の制約を提案している。

- (30) 接辞のみでは移動できない (Lebeaux 2009: 53)

つまり語彙要素でない要素 (pro) に付加した接辞は非拘束接辞となり、そのような接辞の移動は禁止されるということである。Lebeaux (2009)は DP が格を付与される時にその上に KP という特殊な投射を想定する。

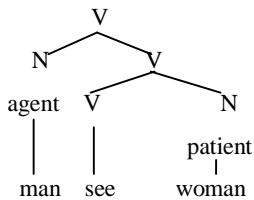


A 移動は格を持たない要素を移動させるので、語彙要素を含まない DP pro を動かす移動である。一方、A' 移動は既に格を付与された要素の移動なので、KP を移動させることになる。格という接辞がついた KP は(30)により移動できなくなる。従って、pro に overlay で語彙挿入が行われることで移動ができるようになる。これが A 移動は overlay の前に行われるが、A' 移動は overlay がなされた後行われるということを導きだす。しかしながら、この説明は支

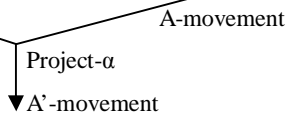
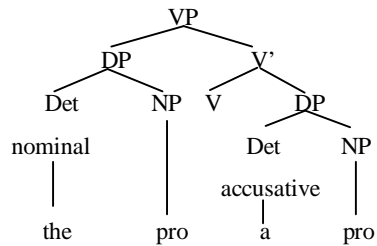
持できない。なぜなら格を接辞として扱うことは一般的でなく、また英語の接辞移動の例を考えると(30)の制約は強すぎるからである。

もう一つは θ 構造と格構造という分けられた構造を想定することである。 θ 構造では語彙範疇を含み、格構造は機能範疇を含む。そしてそれらは Project- α によって融合し、派生の中で統一的な構造となる。

(32) theta structure



Case structure



θ 構造では語彙挿入により θ 表示が生じ、格構造では pro のA移動と格付与が行われる。このような構造を想定することで、格付与された要素を移動させるA'移動は語彙要素を含んだ θ 表示と格表示が融合する、Project- α の後に起こることがわかる。つまり、A移動は pro を移動させ、A'移動は語彙要素を移動させるということである。

これによりA移動とA'移動のoverlayのタイミングの違いが説明できる。しかし、これもまた問題が生じる。ミニマリスト・プログラムでは経済性の観点から余剰性を極力排除し、できるだけ簡潔な派生が求められる。(32)の構造は全てのA移動が行われた後、A'移動が生じることを示す。したがって、一旦A移動で構造を作り上げると、A'移動の際にもう一度下から構造を見ていくという余剰性が出てくる。これはミニマリスト・プログラムにはそぐわない。

本論文の提案に従うと、次の(33a) (=28a)と(34a) (=29a)は単純な派生をた

どる。移動する要素はどれも項なので θ assigner と同じ transfer domain 内に併合される。(33a)で主語 *pictures of John* は θ assigner である主節の T と同じ transfer domain、つまり TP 内で併合される。この時 $John_i$ が him_i に束縛されないように主語 *pictures of John* は VP 指定部/TP 指定部で併合され Condition C を回避する。(34a)では目的語 *which picture of John* は θ assigner の V と同じ transfer domain、VP 内で併合されるので *which pictures of John* が he_i より下で併合されることになり、Condition C を回避できず非文法的になってしまう。

(33) a. The pictures of $John_i$ seem to him_i to be quite wonderful.

b. [[_{TP} [_{the pictures of $John_i$}] [_{VP} [_{VP} seem to him_i to [_{VP} be quite wonderful]]]]]

(34) a. *Which pictures of $John_i$ does he_i like?

b. * [_{TP} he_i [_{VP} [_{VP} like [_{which picture of $John_i$}]]]] Condition C

c. * [_{CP} [_{which picture of $John_i$}] did [_{TP} he_i [_{VP} [_{VP} like [_{which picture of $John_i$}]]]]]

↑
A'-movement of *which picture of $John_i$*

本論文の代案は(30)のような特殊な想定をすることもなく、また Lebeaux (2009)の overlay 分析よりも経済的である。なぜなら、phase 理論に従い A 移動と A' 移動を phase という単位で同時に扱っていくので、一度作った構造をもう一度下から見るという余剰的な操作を含まないからである。

6 . まとめ

本論文では、phase 理論のもと late merger 分析にかわる新しい代案を提示し、関係節と同格節の現象を適切に捉えることができることを示した。また DP の例も扱うことで、今までの先行研究より多くの事実を説明できることを示した。

註

- * 本稿の作成にあたっては、西岡宣明先生から示唆に富む大変有益なご指摘をいただいた。特記して感謝の意を表したい。言うまでもなく、本稿の内容や例文に関する不備はすべて筆者の責任である。
- 1 束縛条件の概念は以下のように定義される。
 - (i) Condition A: Anaphors must be bound in the local domain.
 - (ii) Condition B: Pronouns must be free in the local domain.
 - (iii) Condition C: Referential expressions must be free.
 - 2 一般的に A 移動と A' 移動の特性は以下のように述べられる。
 - (i) a. A-movement optionally leaves a trace.
b. A'-movement obligatorily leaves a copy.
 - 3 vehicle change は束縛条件が適用される前に行われると仮定している。
 - 4 Takahashi and Hulsey (2009)では主節 VP の付加位置において wholesale late merger が生じると主張している。(i)の例文で every は not より狭い作用域を持つことができる。

(i) [Every child]_i doesn't seem to his_i father to be smart. (>not) (not >)

every がそのような作用域を持つには not と seem の間に(ii)のような every のコピーを残さなければいけない。

(ii) [_{TP}[every child] doesn't [_{VP}[every child] [_{VP} seem to his_i father to be smart.]]]

つまりこれは every が VP に付加できることを示す。

(Takahashi and Hulsey 2009: 402)
 - 5 wholesale late merger 分析は Lebeaux の late merger 分析と相いれない。Lebeaux の late merger 分析は投射原理を基に想定されているため、演算子や決定詞の補部となる制限節は項として基底構造から併合されなければいけない。したがってこのような制限節は late merger できないことになる。このことから Takahashi and Hulsey の枠組みで Lebeaux の late merger 分析は扱えない。

6 Takahashi and Hulsey(2009)では以下の例文が文法的として出されている。

- (i) [Which corner of John_i's room that Mary repainted] was he_i sitting in?

(Takahashi and Hulsey 2009: 408)

本論文の代案に従うと付加詞 that Mary repainted は late merger されるが、項である which corner of John_i's room は述語の transfer domain、すなわち VP 内で併合される。そのため he_i が John_i を束縛してしまい、Condition C に違反する事を予測してしまう。しかしながらこれについては容認性に差異があり、非文法的という話者もいる。また、Sauerland (1998)では(i)と同様な例(ii)が出され非文法的として扱われていることから、(i)の例を非文法的と判断するならば本論文の問題とはならない。

- (ii)*[Which argument of John_i's that Mary had criticized] did he_i omit *t* in the final version?

(Sauerland 1998: 44)

参考文献

- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding: The Pisa Lectures*, Dordrecht, Foris
- Chomsky, Noam (1993) "A Minimalist Program for Linguistic Theory," *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, ed. by Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries," *Step by Step: Essays on Minimalism in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero, and Maria Luisa Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA.
- Fiengo, Robert and Robert May (1994) "Indices and identity," *Linguistic Inquiry Monograph* 24, MIT Press, Cambridge, MA

- Fox, Danny (1999) "Reconstruction, Binding Theory, and the Interpretation of Chains," *Linguistic Inquiry* 30, 157-196.
- Henderson, Brent (2007) "Matching and Raising Unified," *Lingua* 117, 202-220.
- Hulsey, Sarah and Uli Sauerland (2006) "Sorting Out Relative Clause," *Natural Language Semantics* 14, 111-137.
- Lebeaux, David (1988) "Relative Clauses, Licensing, and the Nature of the Derivation," *Perspectives on Phrase Structure: Heads and Licensing*, ed. by Susan Rothstein, *Syntax and Semantics* 25, 209-239, Academic Press, NY.
- Lebeaux, David (2009) *Where Does Binding Theory Apply?*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Miyagawa, Shigeru. (2010) "Why Agree? Why Move?: Unifying Agreement-Based and Discourse Configurational Languages," MIT Press, Cambridge, MA.
- Nunes, Jairo (2004) "Linearization of Chains and Sideward Movement," *Linearization of Chains and Sideward Movement*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Sauerland, Uli (1998) "The Meaning of Chains," Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, MA.
- Sauerland, Uli (2003) "Unpronounced Heads in Relative Clauses," *The Interface: Deriving and Interpreting Omitted Structure*, ed. by Kerstin Schwabe and Susanne Winkler, 205-226, John Benjamins, Amsterdam.
- Schachter, Paul (1973) "Focus and Relativization" *Language* 49, 19-46.
- Takahashi, Shoichi and Sarah Hulsey (2009) "Wholesale Late Merger: Beyond A/A'-Distinction", *Linguistic Inquiry* 40, 387-426.